

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）
令和3年度（2021年度）発生予報第9号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和3年度（2021年度）病虫害発生予報第9号（12月予報）

I 気象予報：令和3年（2021年）11月25日福岡管区气象台発表

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	50	30	20
	降水量	40	30	30
	日照時間	40	40	20

II 【今後、注意すべき病虫害】

1 発生の概要

作物	病虫害名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
カンキツ	ミカンハダニ	並	並	—	やや多～ やや少(±)	気温低(－) 降水少(+)	
冬春 トマト	黄化葉巻病	多	多	黄化葉巻病 多(+) コナジラミ やや多(+)	多～並(+)	(コナジラミ) 気温低(－)	
	灰色かび病	並	並	並(±)	並(±)	降水少(－)	
	葉かび病	並	並	並(±)	並(+)	降水少(－)	
	疫病	並	並	並(±)	並(±)	降水少(－)	



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春ナス	灰色かび病	並	並	並(±)	並(±)	降水少(-)	
	すすかび病	並	並	並(±)	並(±)	降水少(-)	
冬春キュウリ	うどんこ病	やや多	やや多	やや多(+)	-	降水少(-)	
イチゴ	うどんこ病	やや少	並	並(±)	並(±)	降水少(-)	
	ハダニ類	やや多	並	やや多(+)	並(±)	気温低(-)	
	アザミウマ類	やや多	並	多(+)	やや多~並(±)	気温低(-)	
レタス	菌核病	並	並	並(±)	並(±)	降水少(-)	
冬春果菜類	コナジラミ類	並	並	トマト やや多(+) ナス 並(±) キュウリ やや少(-)	トマト やや多~並(+) ナス やや多~並(+) キュウリ 並(±)	気温低(-)	黄色粘着板 トラップ調査 八代市 やや少(-)
	アザミウマ類 (イチゴ除く)	やや少	並	ナス やや少(-) キュウリ やや少(-)	ナス 並(±) キュウリ 並(±)	気温低(-)	

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。



2 予想発生量、根拠、対策等

◎カンキツ

1) ミカンハダニ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 防除員報告では平年比やや多～やや少であった(±)。

(3) 対策 ア 収穫時にミカンハダニが寄生している場合、収穫後に増殖し被害を及ぼすことがあるため、収穫期間近に発生が確認されたら薬剤防除を行う。特に、不知火等の収穫後貯蔵する品種では発生に注意する。

イ 収穫期間近に薬剤を散布する場合には、薬剤の使用時期に注意する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

◎冬春トマト

1) 黄化葉巻病

(1) 発生量：多

(2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、発病株率4.4%(平年0.9%)で平年比多の発生であった(±)。

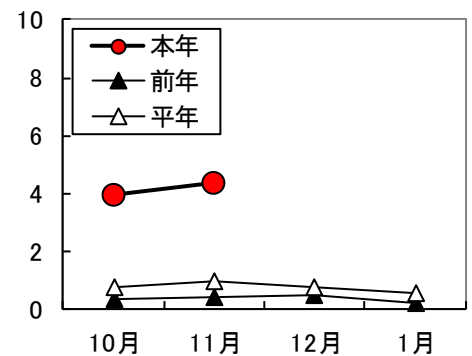
イ 11月の巡回調査では、コナジラミ類の寄生葉率2.6%(平年1.1%)で平年比やや多の発生であった(+)

(3) 対策 ア タバココナジラミを施設内に入れない対策を徹底する(3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照)。

イ 施設内外の雑草は、タバココナジラミの重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、タバココナジラミの早期発見に努める。

エ その他、防除の詳細について令和3年10月27日付け発生予察注意報第3号も参考にする(<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/R3/yosat/211027tyui.pdf>)。



黄化葉巻病の発病株率の推移
(冬春トマト)

2) 灰色かび病

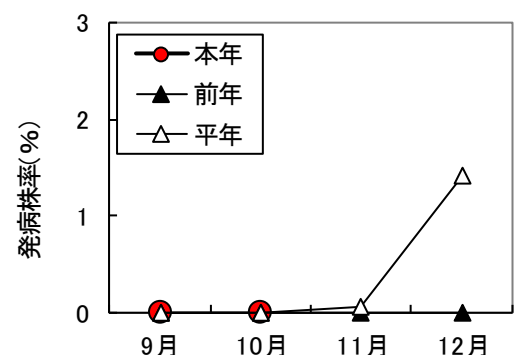
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、茎葉・果実とも発病株は確認されず(発病株率平年 茎葉0.1% 果実0.0%)、平年並の発生であった(±)。

(3) 対策 ア 過度のかん水を避けると共に、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

イ 発病果、発病葉、花弁は伝染源となるので、早期に除去し処分する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



灰色かび病の発病株率(茎葉)の推移
(冬春トマト)



3) 葉かび病

(1) 発生量：並

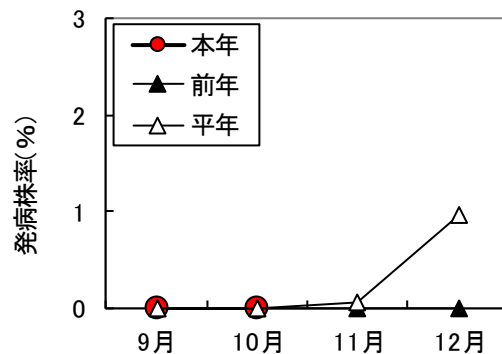
(2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年0.1%）、平年並であった（±）。

(3) 対策 ア 抵抗性品種であっても発病に注意し、発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ 発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

ウ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



葉かび病の発病株率の推移
(冬春トマト)

4) 疫病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年0.0%）、平年並であった（±）。

(3) 対策 ア 発病後は防除が困難なので、薬剤防除は予防に重点をおく。前年に発生が多かった場合は、定期的に薬剤散布を行う。

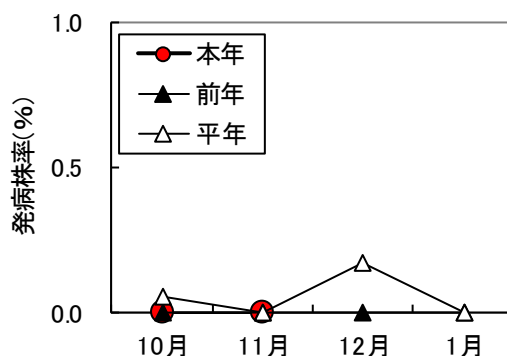
イ 窒素質肥料の多用を避ける。

ウ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。

また、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

エ 発病果、発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



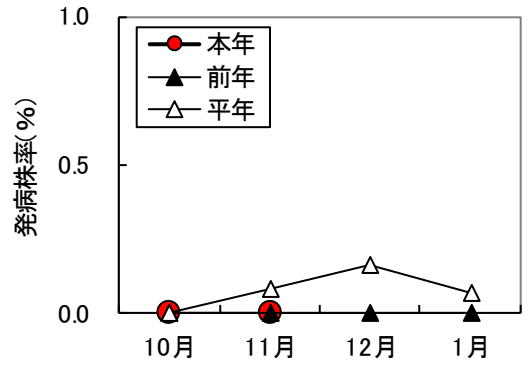
疫病の発病株率の推移
(冬春トマト)



◎冬春ナス

1) 灰色かび病

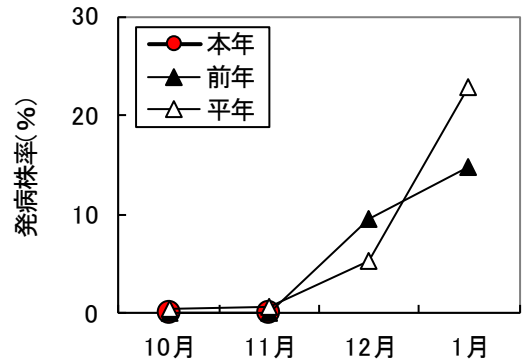
- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、発生株は確認されず（発病株率平年0.1%）、平年並の発生であった（±）。
- (3) 対策 ア 過度のかん水を避けると共に、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。
イ 発病果、発病葉、花卉は伝染源となるので、早期に除去し処分する。
ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



灰色かび病の発病株率の推移
(冬春ナス)

2) すずかび病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年0.5%）、平年並の発生であった（±）。
- (3) 対策 ア 発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。
イ 過度のかん水を避けると共に、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。
ウ 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。
エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

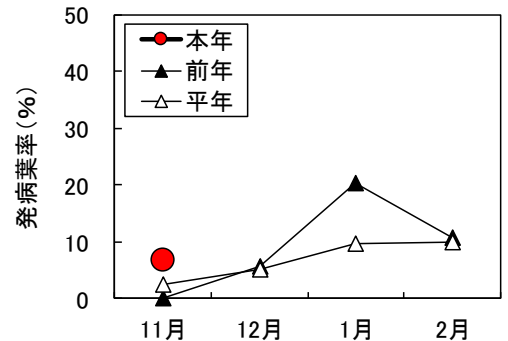


すずかび病の発病株率の推移
(冬春ナス)

◎キュウリ

1) うどんこ病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、発病葉率6.8%（平年2.5%）、平年比やや多の発生であった（+）。
- (3) 対策 ア 多発後は、防除が困難なので初期防除を徹底する。
イ 発病葉や不要な下葉など取り除き、ほ場外で処分する。
ウ 薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。
エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



うどんこ病の発病葉率の推移
(冬春キュウリ)



◎イチゴ

1) うどんこ病

(1) 発生量：やや少

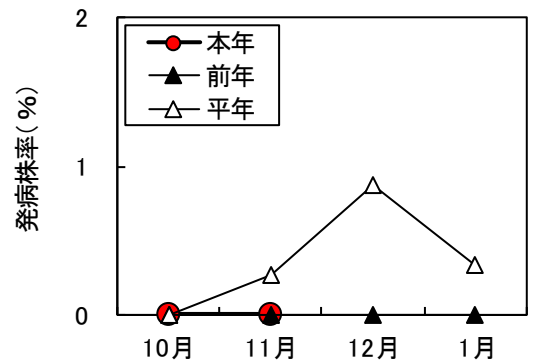
(2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、葉・果実ともに発病株は確認されず（発病株率平年葉0.0% 果実0.0%）、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 多発後は防除が困難なので、初期防除を徹底する。

イ 発病葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。

ウ 薬剤防除は葉裏に十分かかるように散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



うどんこ病の発病株率の推移(イチゴ)
(10-1月:本ぽ)

2) ハダニ類

(1) 発生量：やや多

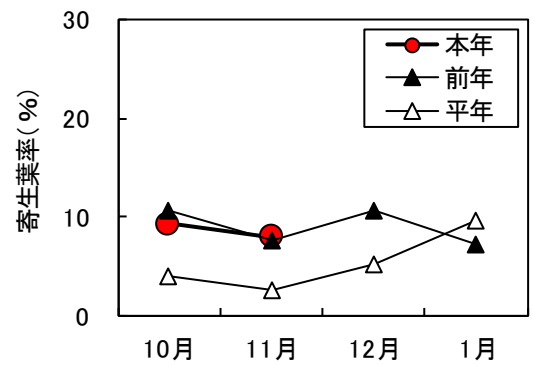
(2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、寄生葉率8.0%（平年2.7%）で平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 寄生葉や下葉かぎした老化葉は通路に放置せず、ポリ袋に詰めるなどしてほ場外に持ち出し適切に処分する。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期に防除を徹底する。

ウ 薬剤は下位葉の葉裏にも十分かかるように散布する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



ハダニ類の寄生葉率の推移(イチゴ)
(10-1月:本ぽ)

3) アザミウマ類

(1) 発生量：やや多

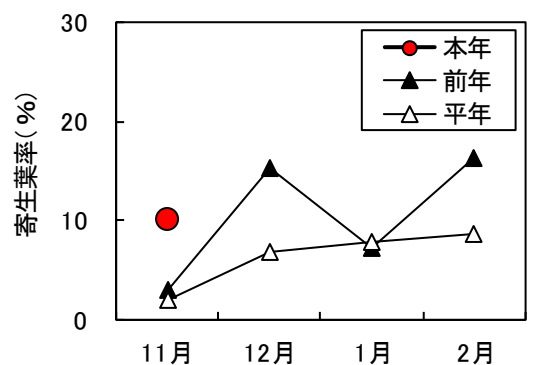
(2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、寄生株率10.0%（平年2.0%）で平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 花を注意深く観察するとともに、粘着板トラップを設置して早期発見に努め発生初期の防除を徹底する。粘着板トラップの色は、ヒラズハナアザミウマに対しては青色を、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ 施設内外の雑草は、重要な発生源となるので除草を徹底する。

ウ 薬剤防除にあたっては、天敵や訪花昆虫（ミツバチ等）への影響を考慮し、薬剤を選定する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



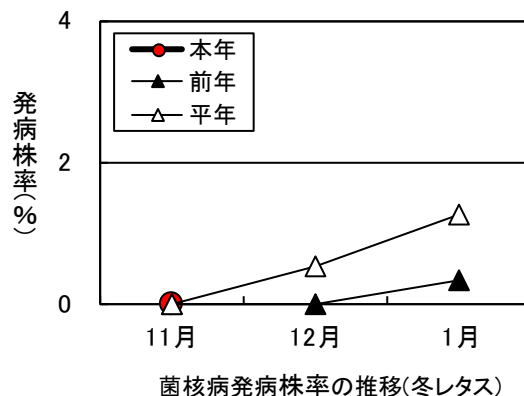
アザミウマ類の寄生葉率の推移(イチゴ)
(11-2月:本ぽ)



◎レタス

1) 菌核病

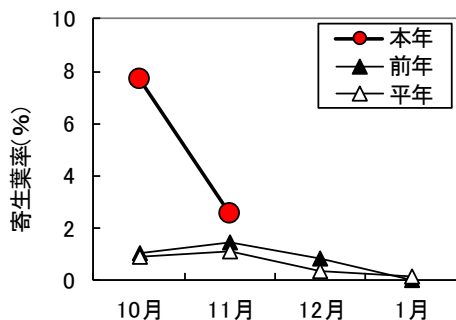
- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、発生を認めず（発病株率平年0.0%）、平年並であった（±）。
- (3) 対策 ア 予防が基本となるため、被覆前に薬剤散布を行う。
イ 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。



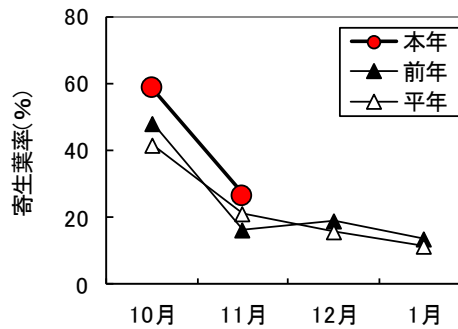
◎冬春果菜類

1) コナジラミ類

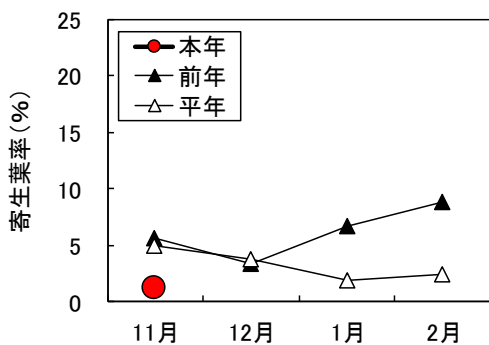
- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、トマトで寄生葉率2.6%（平年1.1%）で平年比やや多、ナスで寄生葉率26.8%（平年21.3%）で平年並、キュウリで寄生葉率1.2%（平年5.0%）で平年比やや少の発生であった（±）。
イ 11月上旬の10日間、八代市の野外に設置した黄色粘着板トラップのコナジラミ類誘殺数は0.0頭/枚/日（平年0.3頭/枚/日）で平年比やや少であった（-）。
- (3) 対策 ア タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、トマト黄化病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。
イ 施設内部の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。
ウ 黄色粘着板トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。
エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



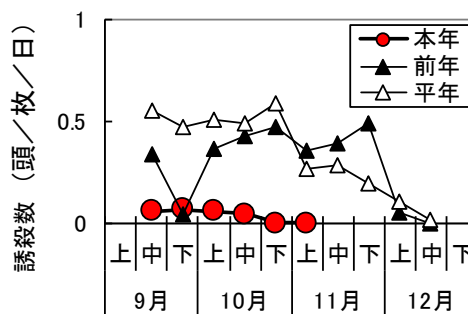
コナジラミ類の寄生葉率の推移 (冬春トマト)



コナジラミ類の寄生葉率の推移 (冬春ナス)



コナジラミ類の寄生葉率の推移 (冬春キュウリ)



八代市における野外コナジラミ類の黄色粘着板誘殺数の推移



2) アザミウマ類

(1) 発生量：やや少

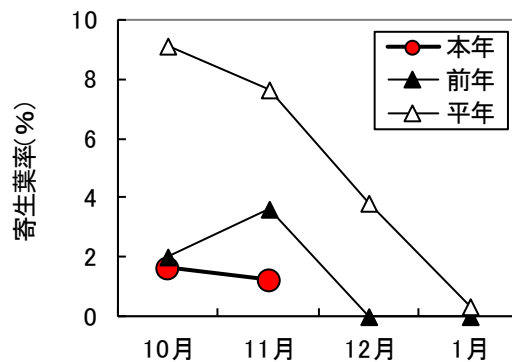
(2) 根拠 ア 11月の巡回調査では、ナスで寄生葉率1.2%（平年7.7%）で平年比やや少、キュウリで寄生葉は確認されず（寄生葉率平年0.9%）平年比やや少の発生であった（一）。

(3) 対策 ア 12月以降も施設内では発生が認められるので、粘着板トラップを設置し、早期発見に努め、発生初期からの防除を徹底する。粘着板トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。

ウ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



アザミウマ類の寄生葉率の推移
(冬春ナス)

3 防除のポイント等

冬季における多湿、寡日照下での病害対策

1 技術内容

- (1) 暖房機や循環扇で空気を循環させ、ハウス内の温度むら、湿度むらをなくす。
- (2) 地面をマルチフィルムで全面被覆したり、うね間（通路）やうね上に敷わらを行う。
- (3) 外張（天井）等の結露水は、植物体にかからないように、谷下等へ排水する。
- (4) 整枝、誘引、摘葉等をこまめに行い、採光を良くする。
- (5) 厳冬期（低温、寡日照期）は少量・多回数かん水を心がける（根傷み防止）。
- (6) 液肥を利用した施肥管理を行う（草勢維持）。

2 留意事項

- (1) 最低夜温の確保等、温度管理に注意しながら換気を行う。
- (2) 多湿、寡日照条件下では病害が発生しやすく、収量・品質の低下につながるため、病害の早期発見と適期（予防）防除を心がける。
- (3) 病害葉及び病害果等は早期に除去しハウス外に持ち出して適正に処分する。



野菜のウイルス病まん延を防止しましょう

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これからの時期は、野外の微小害虫の数は大きく減少し、野外からの侵入はほぼ無くなります。しかし、温度の高い施設内では冬期でも活発に活動しますので、今後もウイルス病の発生拡大への警戒が必要です。また、地域におけるウイルスの伝染環（つながり）を断ち切るために、冬期においても施設外にウイルスを拡散させないようにする必要があります。

そこで、以下の対策を必ず行いましょう。

1 保毒虫を施設内で「増やさない」対策

施設内での感染拡大を防ぐため、施設内に残った微小害虫を増やさないようにしましょう。また、施設内での発病を抑えることで、栽培終了後に保毒虫が野外へ飛び出す危険性を減らしましょう。

(1) 施設内に粘着板トラップを設置し、害虫の早期発見、初期防除を徹底する。

(2) ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスを保毒するため、微小害虫の防除を継続して行う。

(3) 発病株は、重要な伝染源となるので適正に処分する。

2 保毒虫を施設外に「出さない」対策

周辺施設の作物や野外雑草にウイルスを定着させないために、栽培が終了した施設から微小害虫を逃がさないようにしましょう。

(1) 微小害虫の施設外への飛び出しを防ぐため、必ず施設を密閉して植物を枯らす。

(2) 施設内の片付けは、密閉処理が終了してから行う。密閉処理の期間はタバココナジラミは植物が枯れて1週間以上、アザミウマ類は地温15℃以上では2週間以上を目安とする。

III 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
冬春 トマト	すすかび病	やや少	巡回調査では平年比やや少(-)。 発病果、発病葉は伝染源となるので早期に除去し、処分する。
冬春ナス	うどんこ病	並	巡回調査では平年比やや多(+) 発病葉は伝染源となるので早期に除去し、処分する。



作物	病虫害名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
レタス	細菌性病害 (斑点細菌病、 軟腐病、腐敗病)	並	巡回調査では、斑点細菌病、軟腐病、腐敗病はいずれも発生を認めず(発病株率平年0.0%)、平年並であった(±)。予防が基本となるため、被覆前に薬剤散布を行う。
<p>【野菜病虫害の共通対策事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。 			

IV その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病虫害防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室)
(TEL: 096-248-6490) にお問い合わせ下さい。

※なお、本文及び各種トラップのデータ等はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」